

高知大学AP事業の成果と展望

高知大学

塩崎俊彦・高畑貴志・小島郷子・杉田郁代

1 はじめに

本学は、ディプロマ・ポリシーに基づく教育活動を加速させるために、Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革、Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発、Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証する、という3つの柱を立てて、AP事業を進めてきた。本発表では、その取組と成果について報告する。最後に、まとめに代えて、展望を述べていきたい。

【取組】

Ⅰ. 教育改革に向けた意識改革では、教育改革に関する意識の共有化を目指して、次の3つの取組を行ってきた。①FD・SDウィークの実施では、教職協働の視点から、教員だけでなく職員も参加する授業参観を実施した。高知大学の教育の領域である授業を通して、学生の学びの実態把握を行った。②成績評価の厳正化では、全学的な取り組みとして、「成績に関わる申し合わせ」を作成し、実施している。また、本学で運用するe-ポートフォリオにおいて、授業科目ごとに、成績評価の分布を公表している（10人以下の授業を除く）。③外部講師によるファシリテーション力向上のFDを実施し、アクティブ・ラーニング型授業における教員のファシリテーション力向上を図った。

Ⅱ. 多面的評価指標を外部と共同開発では、学修成果の可視化に向けて、全学横断の具体的能力指標を作成した。具体的には、「10+1の能力」に基づいたディプロマ・ポリシー（DP）の見直し、10+1の能力指標（ルーブリック）の作成を行った。指標の作成において、地域・企業及び高等学校関係者が参画する協議会を開催し、地域・社会からのニーズを反映させた。作成したアセスメントを用いて学生による自己評価を実施し、その結果をe-ポートフォリオに蓄積し、教員と学生が共有できるように整備した。それらの取組によって、本学の「学修成果の可視化」の基盤を構築できた。

Ⅲ. 学生の成長を地域と社会と協働して検証するでは、本学の卒業生が「社会で活躍できているか」について、検証を行った。具体的な取り組みとしては、卒業生調査を実施した。卒業生調査は、インタビュー調査と質問紙調査の二段階で行い、卒業生による自己評価と就職先の上司による他者評価の2つの評価方法から分析検証を行った。その中で、本学の規定した「10+1の能力指標」が、社会のニーズに適合した指標であるかどうかについても検証した。

【成果】

上記の取組により、本学の「教育の質保証」を再生加速させる、3つの成果を得ることができた。

1. 学部・コースを超えた全学的な取組の定着
2. 卒業後も視野に入れた現代社会のニーズにあった能力指標の開発
3. アセスメント・スケジュールに代表される教育の質保証に関する全学的な体制の整備

【展望】

本事業の取組を振り返ると、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」で求められる「卒業後の成長をも意識した質の向上を図る必要性」の難しさが見えてくる。卒業生調査での回収率の確保、在学時とのものさしのチューニング、卒業生の自己評価の信頼性の担保などが、主要な課題として挙げられる。また、可視化されたアセスメントの成果をどのように教学マネジメントに組み込んでいくかという点も、課題として挙げられる。まずは、AP事業で確立したアセスメントにより浮かび上がる経年的な変化を、広く学生・教職員へフィードバックしていくことが重要と考える。